

## ●初めて原子力防災訓練に参加して見えた問題点 大切な命に向き合うために

8月27日高浜原発事故を想定した初の広域避難訓練が行われ、私は高浜原発 UPZ 圏内の住民として、県外（兵庫県）避難を想定した訓練に参加した。本来避難計画での住民の移動手段は、自家用車が想定されているが、この日はマイクロバスを使用。同乗者は住民20名、町職員2名、内閣府職員1名、運転手と極めて少人数の訓練となった。他の市町も同様に小規模で、地震による外部電源喪失での事故想定だが、道路もインフラも通常通り、準備万端という現実離れの訓練だった。予め参加者に配られた訓練の行程表には、細かな時間設定が記載され、集合時間に間に合うように避難指示前に自宅を出る参加者もいて、増々意味のない訓練となった。同行の内閣府職員は、実施状況を逐一報告していたが、行程表通り行動することを目的にしたイベントのようにさえ思えた。確かに速やかな避難の実施は最重要課題ではあるが、それは内容が伴ってのこと。参加者からは「参加した実感のない訓練だった」との声も聞かれた。多くの問題の中から、安定ヨウ素剤配布に絞って報告します。



集合場所である公民館の入口で、＜安定ヨウ素剤の服用に係る注意事項＞と書かれた1枚の紙が渡され配布場内へ。口頭での説明はなく、私はその紙を読む間もなく配布の列に。いきなり「ヨウ素剤へのアレルギーありませんか？」と聞かれる。住民から服用薬との飲み合わせの質問があったが、同席の医師への確認は無く、「飲んだ直後の30分程度、体調の異変に注意しながら避難して下さい。異変感じた場合は、すぐに保健所に連絡を」と、ヨウ素剤代わりの飴玉と、お茶が渡された。＜注意事項＞には、◇アレルギーがある方、配布を希望しない方には配布しないので、申し出てください。と明記。国は副作用の問題がある事を理由に、先に避難する PAZ 住民にのみ、丁寧な説明と十分な問診の上、安定ヨウ素剤の事前配布を実施した。その際も造影剤等への過敏症があったと聞く。また若い世代はヨード自体になじみが薄く、はたして事故の混乱時にアレルギーの有無の即答ができるのだろうか？高線量のもと屋内退避を強いられた圧倒的多数の UPZ の住民へは、時間の短縮から、説明も問診もなし。もし副作用が出て連絡先の保健所は大混乱で、誰が対応するというのだ。またヨウ素剤アレルギー有の住民は、「とっとと逃げる」必要があるのに、無用の被ばくを強いられることになる。最低でも UPZ 住民には事前配布が必要と再認識した。さらに＜注意事項＞には、◇被ばく予防効果は服用のタイミングが大変重要である為、**国が服用の指示を出しますので、それまで決して飲まないでください。**と太字で書かれ、訓練でも、そう念を押された。

スクリーニング・除染会場のあやべ球場に向かう車中、いつ指示が出るのか確認したが、町職員は「田中俊一規制委員長長の指示があったらだと思う」と不安げ、内閣府職員は、「この辺まで来れば線量もだいぶ低くなっているのでは、(服用の)必要はないのでは、たぶん今回服用指示は出ないと思う」と答える。その言葉通り結局指示は出なかった。本来避難指示が出た時点かなり高線量で、当然服用して避難のはず(京都府下ではそのように指示)。いったい服用にどんな基準があり、どのタイミングで指示が出されるのだろうか。国は安定ヨウ素剤を、住民の安全を守る為ではなく、段階的避難という国のシナリオの単なる道具にしてしまっていると強く感じた。「時間と質」この矛盾に解決策などない。だが、立地地元の住民として大切な命に向き合うことを諦めるわけにはいかない。浮き彫りにされた多くの問題点と事故の悲惨さを伝える努力を続けたいと思う。(おおい町 M)